「希望の国のエクソダス」 村上 龍著

# 不登校生のつくる理想区域

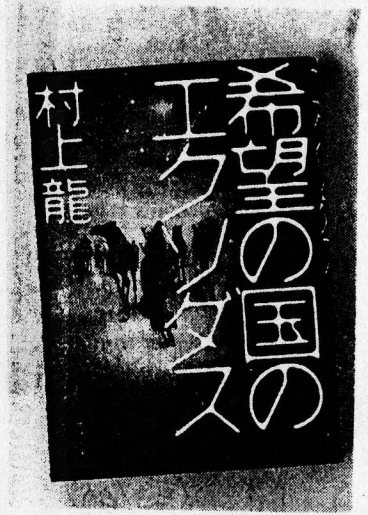
村上龍は、映像的イメージを瞬発的に喚起させる作家である。本作はそんな彼には珍しくどちらかと言えば、イメージではなく、作家本人のイデア（理念）を論理的に描いている。あとがきに執筆動機について、四年前インターネットの掲示板で「今すぐできる教育改革は？」という質問を出したところ、用意した「数十万を超える集団不登校が起こること」という正解がなく、しかも多くの読者からその考えを受け入れてもらえなかったため、これをモチーフに小説を書くことにしたと述べている。美談にもとれるし、思い込みの強い話でもある。だが使命感にこだわりつづけ、読者を魅了してきた彼らしい行為とも言える。

物語は二〇〇一年、パキスタンとアフガニスタンの国境で、部族の一員として銃を下げ行動する十六歳の日本人少年が、テレビ画面に登場するところから始まる。「日本が恋しくないか」というアメリカの記者に「あの国には何もない。もはや死んだ国だ」と超然と言い放つその姿は多くの同世代の若者の支持を受け、そこから刺激を受けた中学の不登校生たちはネット・ビジネスを開始する。彼らにももちろん中心的役割の人物はいて、最終的に北海道の野幌に、イクスという地域通貨と風力発電をもつ経済的にも独立した理想区域をつくっていく。

しかし読んでいて発想の根底に疑問を持つ。これまでにない新しい集団の登場を問いながら、これではやはり実力と指導性を身につけたリーダーの存在が前提ではないか。作者が執拗に「組織」や「メンバー」という言葉を否定し、〝ネットワーク〟の自由さと個別性を強調してみても、リーダーやカリスマが質と形を変え現れてきたとしか思えない。

これをもし《ファンタジー》として読めというのならできないこともないのだが、若干平板な感は否めない。自己や制度を根本から問わないかぎり、組織や集団の新たな形は見えてこない。中心なき変動をどう描くかにこそ、重要なテーマはあると思う。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）




文芸春秋・1571円